【論文】

御旅所の研究
～若宮八幡宮、柞原八幡宮、八坂神社～

佐藤　正彦

A Study of Otabisho
~Otabisho of Wakamiyahachiman, Yusuharahachiman and Yasaka Shinto Shrine ~

Masahiko SATO

Abstract: This thesis described to Otabisho of there Shinto Shrines at Oita, Usuki and Kurume-city.

Keywords: Otabisho, Shinto shrine, Jinko festival, Oita-city,Usuki-city,Kurume-city

目次

第１章　若宮八幡宮の神幸祭（久留米市）
第２章　柞原八幡宮神幸祭（大分市）
第３章　八坂神社神幸祭（臼杵市）

はじめに

神社建築を究明する方法として、造営資料により建物の沿革を明らかにすることも重要であるが、種々の神事に於ける建築物の使われ方、すなわち機能面から空間構成を追求することも重要である。前者を無機的方法と称するならば、後者はまさに有機的方法とでも言えよう。

今回は、若宮八幡宮（久留米市草野町大字青木）の神幸祭（昭和60年９月14日～16日実地調査）、柞原八幡宮（平成17年９傘16日～20日実地調査）及び八坂神社の神幸祭（平成12年８月14日実地調査）を紹介する。

第１章　若宮八幡宮の神幸祭（久留米市）

若宮八幡宮の神幸祭は古くは毎年行われていたが、現在は２年毎に開催されている。そして、昭和59年度久留米市指定無形民俗文化財に指定されている。

第１節　主要建築物の構造

１－１．本殿　三間社流造　銅板葺

１－２．拝殿　桁行３間　梁間３間　入母屋造　桟 瓦葺

１－３．御旅所（邨宮）　桁行３間　梁間２間　向拝１間　入母屋造　正面以外下屋付き 桟瓦葺

第２節　神輿の構造

祭神は中央が仁徳天皇、正面向って右側が高良玉垂命、左側が住吉命の３柱である。神輿は１基で正面のみに鳥居がたつ。神輿裏側に「明治七年／八月吉日造之」とあって、制作年代が明治７年（1877）であることが分かる。左下には「大工石橋善吉／同善右ヱ門／上市小路町／神輿師城戸仁平」、背面に「上市小路／城戸／仁平／仕立之」とあって、製作者もはっきりしている。

第３節　神幸祭の歴史的変遷

当社神幸祭は遠く草野氏居城の時より城主自ら神輿随行した。神幸祭は盛大であったが、天正16年（1588）豊臣秀吉のために、草野氏が敗滅してからは、神幸も中断したが、まもなく復興して現在の神幸祭になった。以前は、地元では「放生会」と称していたらしい。『筑後の年中行事十二ヶ月』によれば、「古帳旧記の略事」として、

天正十五年（草野氏敗滅）以上の神学祭　放生会神幸行事（委有古帳写其一部）八月十三日千年川乃漁人乎禁神人前忝三簡日不預穢悪食物乎改忌物忝屋禁女浄人、本社辰刻祝言、巳刻神楽、午刻発神輿、拝殿仁而行列作法次第乎調

潮水　　御弓六十四丁
笛太鼓　　御榊
御幡　四神相応五色幡　盾板四枝

* 建築学科

御幣　　武者十二人騎馬
御笹　　神子等
御玉　　大書坊山伏式有
御鏡　　大宮司神主正列
御剣　　諸寺院正列
神輿
次当時奉行人
次壱丁隔離而草野君自詣　在格式
十三日午刻中馬場壕仁仮座
同日未刻神輿青木原鹿野奉鎮座
十五日迄始終音楽
十六日本宮仁奉還幸諸儀式十三日同前
神楽終而退下

と記す。

上掲によれば、現在と根本的に異なる点は、「武者十二人騎馬」と「大書坊山伏式有」、「諸寺院 正(ママ) 列」などである。すなわち、当時は馬場に於て、競馬が行われ、中でも神幸祭に於ける競馬が最も盛大であったらしい。これは明治27年（1894）に廃止された。後者は、明治以前、神仏習合であったため、どうしても諸寺院僧侶を抜きにすることはできなかったようである。それが、上掲の「放生会神幸行事」と記す所以でもある。

現在の神幸に近くなったのは、明治６年（1873）当社が郷社に定められたのを機会に、山本郡中の副戸長等神職合原宅に於いて会合の上、神事の行列、役割、出夫及び諸費用の協議がなされた。したがって、現在の神幸祭の基礎はこの時定められたと言っても過言ではあるまい。

先掲書によって、明治６年８月15日、16日両日の神幸祭の氏子崇敬者の役付及び諸費用負担高を示すと次のようである。

出払二人　塩水行者四人　大太鼓二人　押一人　神女八人　神官乗馬　但口付人共四疋　輿丁八人但日傘持一人共　太刀持五人　御弓持三人　武者六人
以上青木副戸長掛り
獅子一式　楽人一式　毛槍七人　押一人　猿田彦神二人　榊神人一人　押羽神人二人
以上青木副戸長掛り
御供碓持二人　押一人　榊神人二人　御鉾持三人　白杖持三人　指羽持三人
以上山本西泉弥永副戸長掛
御供碓持二人　押一人　榊神人二人　輿丁八人　外二日傘持一人共　指羽人二人
以上山本柳坂上野副戸長掛
神馬二疋　御供棲持二人　押一人　榊神人二人　指　羽神人一人　武者一人
以上善導寺木塚中垣副戸長掛
神馬二疋　押一人　榊神人四人　指羽神人六人　武者二人
以上善導寺飯田井上副戸長掛
押一人　榊神人二人　御盾板持六人　輿丁八人　外二日傘持一人共　指羽神人二人
以上大橋常持山川副戸長掛
押一人　榊神人二人　御旗持六人　指羽持五人
以上大橋蟻川中島副戸長掛
費用総額　五貫貳百貳拾六匁九分
内訳　貳貫四拾匁氏子青木中負擔　参貫百八拾六匁九分崇敬者郡中負擔

上掲によれば、各人数の違いは別として「神官乗馬」や「神馬二疋」（合計神馬四疋）などは昭和60年（1985年９月15日）現在見当らない。神官も徒歩である。そして、８月15日、16日に興行されていた。これは昭和18年まで毎年続けられ、戦中、戦後中断され、昭和36年頃より復活され９月15日、16日に興行されている。また、費用内訳から「吉木中負担」以外に「郡中負担」があって、役割負担も「吉木副戸長」以外に「山本西東弥永副戸長」や「山本柳坂上野副戸長」「善導寺木塚中垣副戸長」「善導寺飯田井上副戸長」「大橋常持山川副戸長」「大橋蟻川中島副戸長」まで、かなり広い範囲に亘って、この神事行事が支えられていたことが窺える。しかし、現在は、吉木東・西と合原部落の３部落の負担によって行われている。それ故、現在の神事は明治６年時に比べてかなり簡略化されている。しかし、旧規はおよそのところでは失われていない。

因に、明治７年、８年と昭和54年、58年、60年の神幸行列を別表にまとめた。

別表によれば、昭和に入って、獅子や風流や面（赤鬼、青鬼）が加わっている。つまり、獅子舞や風流舞などが神幸に参加することによって、人々の無病息災ばかりでなく、五穀豊穣や悪魔払いなどをしようとするものであろう。面などはまさに払われる悪魔の役割を果たしているものと推測される。しかし、一方では神輿を護身とするともいわれている。また、元来神の祭りであったものが、獅子舞や民俗舞踊の一種である風流が加わることによって、神幸祭がより一層民衆の祭りに近づいているようにも推察される。

第４節　神幸祭

４－１．神幸祭までの行事と準備

１）８月１日　風神祭（一般に風祭りと呼ぶ）

このとき、谷区（青木東、青木西、合原）の3区そ

れぞれで選出された総代６名によって作られた御神幸の予算編成案が掟出される。

出席者：区長、総代で検討され、各区へ持ち帰り、各区の寄合で承認される（昭和56年度は１戸2,300円の負担金、昭和58年度は2,500円）。

２）８月21日　役割会議

各区選出（２面ずつ）の神事方６名により、楽を除いた神輿、風流、獅子、行列の全部を決める。

また、９月３日を期限として、幼女の八乙女参加募集をはじめる（本年最終的参加者は６名）。

３）９月１日　本殿草刈

４）９月11日　本宮清掃、注連縄上げ

参道、楼門などを含めて一日がかりで行う。なお道端の草刈りも行う。この頃、夜、公民館等を会場として、風流、楽の練習、選果場を利用して獅子の練習が盛んである。

５）９月13日　旗竿立

主として神事方により、神輿の組立、安置、風流道具等の取り出し点検を行う。

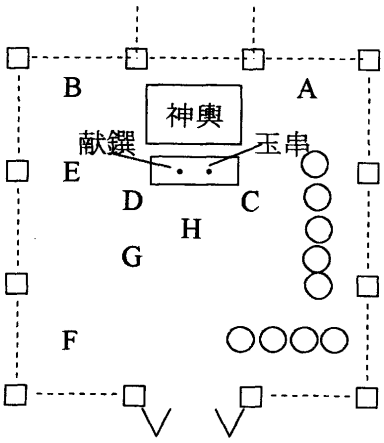
６）９月14日　神幸準備、宮司宅前に青竹４本をたて注縄をうける。

頓宮（御旅所）で風流、行列が衣裳を着用して行列を和み、その年その年によって異なるが、主な道を歩く。

７）９月14日　御神霊祭（みたまうつしと呼ぶ）。９月14日夜８時から約１時間。

灯を全部消し、闇の中で神職により、本殿奉安の御神霊を御輿の中に移す。

この間、楽は暗闇の中で奏楽。曲名は「越天楽」、御神体は「見ると目がつぶれる」ということで神職以外はわからない。



（若宮八幡宮拝殿内位置図）

拝殿に安置された神輿は畳上に４帖分程の蓆を敷いた上に後ろ向きに置かれ、向って右側面から正面、左側面にかけて白地に右巴紋付の幕を張る。左側面幕下をとめて、幣殿に出入り出来るように拝殿軒面中柱に幕を結びつける。

ところで、神幸祭は、御神体を神輿に移乗する行事なので、もう少し順序を追って詳述する。

第一に、「越天楽」奏者と氏子総代達が定刻８時に三々五々集合し、上図のように所定の位置に着席し、頃を見はからって、宮司及び知り合いの別の神官（共に白装束）が着席する。

第２に、宮司がAの太鼓を打って、御神霊祭の始りとする。

第３に、宮司が席にもどって、氏子総代に向って一礼し、挨拶する。

第４に、神官がBの位置に入り、「しゅばつ」と声を出す。

第５に、神官がCDEFで御幣をもって、御祓いをする。Fの位置ではまず、楽人に対して、次に廻れ右して氏子総代に対して御祓いする。その後、神官は御幣をたてて、自席にもどる。

第６に、拝殿や幣殿・本殿の電灯を宮司の合図と共に消す。

第７に、宮司が本殿内に入って、御神体３体を神輿に移乗する。この間宮司は本殿内と神輿間を３往復するのであるが、登階段があるため、宮司は手さげ提灯を自ら持って往復する。この間ずっと「越天楽」が奏楽される。

第８に、宮司が自席にもどって、電灯をつけよと合図すると共に、「越天楽」の奏楽が終る。

第９に、宮司が神輿にかけてあった白幕を自らとる。

第10に、宮司の合図と共に、氏子総代や楽人遵が神楽をまず向って右に、次に左に振って、中央におし込み、神輿台の上に安置する。そして、前に献饌台を置く。したがって、神輿の正面が、ここで初めて、拝殿に向って正面に現れることになる。

第11に、宮司の献饌の声と共に、神官が神輿正面の献饌台に三方２個を置く。一方は神酒と杯、一方はフタモノなどである。この間、奉楽がある。

第13に、宮司がHの場所から、神輿に向って、二礼し、祝詞を奏上する。奏上中、全員低頭する。終ると、宮司は二礼に二拍手一礼をし、自席にもどる。

第14に、宮司が献饌台の前に、それより少し低い高さ１尺程の玉串台を置く。そして、まず宮司、神官が玉串奉奠し、そのあと宮司の指名順に玉串を神官から頂戴して奉奠する（５人程）。

第15に、宮司が本殿に行き扉をしめ、施錠する。この間奏楽あり。

第16に、宮司が参加者一同に挨拶し、献饌台上の神酒を氏子総代へふるまう。

第17に、もう一方の三方上のふたものなどは、箱に納めて、宮司が宮司宅へもって帰る。

以上、始めてから約１時間で終る。因に、御神体は本殿中央に若宮八幡の仁徳天皇、向って右に高良玉垂命、左に住吉大神で、いずれも直径30cm程の銅鏡との事である。この銅鏡を以上の順で、本殿から神輿に移乗したわけである。尚、９月16日、神輿から本殿に安置する場合もこの順序で行う。

そして、９月14日と16日はこの拝殿に、９月15日は頓宮（御旅所）に大人の男性２人が泊り込む。現在は、青木東・西と合原地区で神幸祭を行っているので、各地区から宿泊者２名ずつを出すことになっている。

４－２．神幸当日（９月15日）の概要

１）午前11時より拝殿において御神霊祭がはじめられる。

神官２名は白張を着用、楽人は黄張の狩衣を着用。供物は海の幸（スルメ、コンブ、タイ）、山の幸（野菜、果物、ショーガ）、米酒を神官が供える。玉串は、総代、区長、来賓が順次供え、拍手を打つ。尚、楽人は「越天楽」の奏楽。終了後、社務所で直会。

２）出発まで

a）午後２時頃から風流、獅子、楽等参々ごご長い石段を登って集まる。２時すぎ、風流の大鐘が「呼び出し」を打つ。集まった者は、楽は拝殿上で、風流は拝殿に向って左側の回廊、獅子は右側の回廊上で衣裳準備をする。２時30分頃、２度めの呼び出し、神官は特に獅子方等全部にわたって拝殿上から御修祓(おはら)いを行う。

b）午後２時40分頃、神社前庭の回廊上で風流の奉納が行われ、同時に楽も奏され（越天楽）、獅子が神の舞をおこなう。獅子は拝殿前で、次いで横庭で行う。

８）獅子、神の前

神の舞①拝殿前にて2頭揃って舞り、場所が狭いので歩幅は小さいが跳ぶような足どりで４拍、頸を高くあげて左右に４回大きく振る、４拍で元の場所に戻り、もう一度くり返し前の人間が交代する。後ろに入った人はかわらない。獅子の口は閉じたままである。３回行う。

神の舞②本殿横庭に移動し、本殿側に黒獅子、回廊側に赤獅子が広場を斜に向き合う。

獅子（２人組、前と後）には、（途中から）獅子裁判がつく。向かいあって前進し、一度口を大きくあけて赤側が、ガッガッと２度かみ合わせて鳴らす。呼びかけに応じるように黒が２度鳴らす。後ろ向きになって、元に戻り、獅子裁判がついて、暴れ獅子のようすで進み場所を交代する。３回行う。

獅子裁判６名	瀬子
・青木東２名	５名
・合　原２名	５名
・青木西２名	５名

年齢上が37才、一番下が22才屈強な若者揃い。

４）風流奉納、獅子舞楽と同時に始め一番最後まで行う。

風流は18通りの打ち方があり、神の舞には、お謡いが途中に入る。雅子が小鉦を打つので、なかなかそろわないことから「ドンデンドドデンドン」というような口拍子がある。

大世話	４人
小世話	６人
太鼓	６人
鐘	11人
笛	７人

当初それぞれの組（獅子、風流）に入ったら大体、それを毎回続ける。太鼓は太鼓、笛は笛と進む（師匠と弟子の間柄に似ている）。

５）出発

午後３時頃、打上げ花火の合図とともに神輿は本殿を出発するが、階段が急なため、獅子方等も手伝う。

参道までおりると、獅子は神官合原氏宅で舞い、神輿も青竹４本で注連縄をはりめぐらした場所で、台に乗せ供揃いをする。

６）御仮屋到着まで

行列は途中の休憩も含め、ゆっくりと進み、お仮屋までの１km強の道程を約３時間かける。

途中、獅子はあらかじめ予定された６～７軒の家に入り込み、そこで酒食のもてなしを受けるが、あとじしの２名（交代がない）は、床柱を背にししをつけ、わらじばきのまま坐わり休憩をとる。

この間、神輿は神輿台の上にのせて休憩し、多勢の人々がお賽銭をあげて右、左から神輿をくぐり、無病息災を祈る。面は、休憩中も神輿の前を往復し青竹で道をたたき悪魔払いをする。小さな子どもはぞろぞろとついてまわったり面に追い散らされたりする。休憩が終って、外に出た獅子は神輿の前で迎えるために舞う。地元の人々は「むかう」と呼んでいる。

最初、獅子だけで獅子頭を高くあげ、大きく左右

に振りながら進み、戻りは獅子裁判がついて、ジグザグに暴れながら戻る。前獅子が交代して同じように舞う。神輿の方も左右に大きくゆらし熱が入ってくると、そのゆらし方も大きく激しくなる。

7）お仮屋到着

御神事は、午後6時半頃神主、宮司代がお仮屋（邨宮・御旅所）に着席して、お仮屋に到着する。

①先ず獅子が庭の端で階段の下（鳥居の外）に向って、2頭並んで舞う。

②風流が行われる。

③神輿庭に入り

④次に神輿がお仮屋（邨宮・御旅所）に安置される。

前庭では、風流と獅子舞が同時に行われる。このとき獅子は出発と同じように神の舞（B）を舞う。

これで第1日（15日）の神幸は無事終了する。尚、神輿番はお仮屋で神輿を警護する。お仮屋境内では、夜12時頃までよどが行われる。

お仮屋に神輿が安置される前は、神輿が安置されるところに、榊が安置され、格子戸引違いがたてられていた。両脇間は格子戸嵌め殺しである。神輿が到着する前に、これらの建具は取り外され、向って左脇に榊も左脇に移動される。

神輿がお仮屋（邨宮・御旅所）に入る直前に、広場で右廻りに向きを変え、後向きに安置される。向拝の注縄に頂部の鳳凰がかかるので、取り外され、安置されてからつける。お仮屋（邨宮・御旅所）は大変合理的に出来ていて、神輿安置のため、かつぐ2本の棒が下屋にとび出すように、板壁に20cm角程の穴があけられている。

神輿が安置されると、献饌台をかつぎ棒間に渡し、玉串台を前に置く。この間に楽人や氏子総代、稚児達が着席する。そして、次の順で、頓宮祭が行われる。

第1に、宮司の頓宮祭はじめの挨拶。

第2に、神官が御幣をとって、御祓いをする。

第3に、宮司が献饌をする。三方6個である。この間奏楽。

第4に、宮司が中央で祝詞を奏上。この間全員低頭。宮司の2礼2拍手1礼で終る。

第5に、玉串奉奠。まず、神官から宮司へ渡され、宮司が行う。次に神官はAに移動して、氏子総代が宮司の指名により順に行う。最後に、稚児2人が行った。玉串はAの位置にいる神官より各自が受け取る。終ると、神官は自席へもどる。

第6に、具膳の儀と宮司が言って、神官が献饌台上の神酒を杯につぐ。そして、自席へもどる。

第7に、宮司、中央に着座し、正面に向って一礼し、自席へもどり氏子総代達に向って、挨拶。

第8に、終って、神官が献演台上の神酒と杯の三方をおろし、氏子総代遵にまわす。

第9に、献饌台より神官と宮司2人がかりで、献饌をおろして箱におさめる。

第10に、背面の下屋が「よど」（芝居）の楽屋がわりに利用されるので、とび出している神輿のかつぎ棒が邪魔にならないように、神輿を前に引き出す。

以上で、あとは、それぞれ思い思いに解散するが、お仮屋右手の仮殿舞台で芝居（この時は大阪から旅芸人が来た）が始められるのである。

4－3．神事第2月（9月16日）の概要。

1）午後3時30分から、お仮屋（邨宮・御旅所）の前で、風流と獅子の神の舞が行われて、神事は若宮八幡宮に向けて出発する。行列の編成と進み方はともに往路と同じである。午後7時頃八幡宮に到着、神輿を拝殿に安置したあと、参加した人々は参々伍々帰宅する。

獅子は拝殿前と拝殿横の広場で、神の舞を行い、その間、風流は回廊で舞う。最後に拝殿前に2・2・3拍の手打ちを行い、神事の行事は全部修了する。

このあと、拝殿では神官により神輿から御神霊を本殿に戻す神事が行われる。

神輿は頓宮をそのままの向きで出発し、そのまま、前向きで本宮の拝殿に9月14日のように安置される。そして、巴紋の白幕が同じようにかけられ、御神体を本殿に戻す。その方法は神輿に移乗する時と全く同じである。

この日は、御神体のない神輿を拝殿に残し、翌17日に神輿庫に神輿を納める。つまり、17日は本宮も頓宮（御旅所）も後かたづけをする。

4－4．神幸編成の衣裳と道具

①獅子　獅子方‥晒の腹巻き、半袖の派手な模様入りのシャツと同様の短パン、白足袋、ワラジ（英彦山から買ってきたもの）、腕にもしっかりと晒を巻く、15人。前獅子は交替するが、後獅子はかわらない。前獅子は獅子頭を持つ。重さは20kg位。中に十字の支柱があり、右手で縦の支柱があり、右手で縦の支柱を持ち、左手で下あごの革を持つ。獅子裁判がつくときは、右手は獅子裁判が縦の支柱を持つため、横さんを持つ。後獅子は前屈して前獅子の帯をにぎってついてまわる。背中に獅子の後半を着けている。獅子頭の左右の目の中心と中心の間20cm。獅子裁判‥6名、はち巻き、若宮八幡宮の名入りのハッピ、白足袋にわらじ。

獅子裁判がつくのは暴れる獅子を鎮めるという型をとる。実際は獅子裁判が頭を力強く振ったり上下したりする。

②面、赤青各１　計２面

ほとんど獅子と共に行動し、獅子が通ったり、舞ったりする道をあける役目をする。

面は、紙を漆で固めたもの、手製の杉の下駄をはく。それぞれ孟宗竹の先を割った約１mの棒を地面にたたきつけて大きな音をたてながら道をあける。

御神事

①風流

イ）旗　白地に風流と墨書きした旗　１人裃

ロ）大鉦　２人で肩に棒でかつぐ　２人

ハ）小鉦　２人１組で小鉦を持つ　10人

（花笠、自無地黒襟の着物　タスキ３色で作った御幣２本背中にさす。鈴のついた手甲、脚はん、自たび、下駄、手に手木をもつ男の子のみ）

ニ）太鼓１：（内径51.5cm、外60cm、巾60cm）６人（頭にシャグマ……菜種油を少量付け長さの半分程なって、あとは指ですく。こうしないと頭をふる時ひろがらない。経８em～10cmの長さ２m70cm赤の綿入のタスキ、バチをもつ。）

（太鼓は４人でかつぐ、太鼓の上は４本柱で幕を張り、右前に「天下太平国家安全」ののぼり、左前は御幣、右後御幣、左後は「若宮八幡宮」ののぼりをたてる。）

ホ）笛　笛の大きさは統一されてはいない、内外黒漆ぬりと内側赤外黒の二通りがある。

②御先払い　長さ127cmの錫杖（細い）それぞれ内側の手にもつ、　２人裃

③大榊　列を清める、榊を切ったもの２人裃

④御幣　２人裃

⑤御汐井　木製の桶（底15cm、桶本体の高さ16cm、全高33cm）、杉の葉で清めの水をまきながら進む

⑥御供稚児　子供　４人裃

123cm×65cm×59cm（足まで入れると75cm）の木製の櫃でふたもある、中味はない、前後に棒を通して２人でかつぐ白丁

⑦狭箱　67cm×38cm×33cmの黒漆ぬり三つ巴の紋　２人白丁

⑧毛槍　白２、黒２　４人羽織

（昔は８人）

⑨御旗　赤３、白２　５人羽織

⑩御指羽　５人　経56cmの竹あみ　羽織

⑪御楯　30cmxl17cmの木板、うらに把手あり、４人裃

⑫御鉾　朱ぬりのまきえ　１人裃

⑬御弓　袋入り　共に絹　１人裃

⑭御太刀　袋入り　２人裃

⑮白杖　150cm巾３mの八角形、白色をしているわけではない。　４人裃

⑯小柳　すぐうしろに来る御神輿を清める　３人裃

⑰猿田彦神　紅白の面（長さ30cm、厚さ25cm、鼻が高い樺の上部につける、最先端に榊）　２人裃

⑱御神器　神旗の方に剣、もう１本に縮の袋入りの銅鏡と玉（滑石製）の管玉、小玉、勾玉をじゅずつなぎにしたもの　２人裃

⑲大御幣　神のよりしろとして、御幣と麻　１人裃

⑳御神輿　基底部４尺×４尺　下側から見ると次の墨書がある。

博多上西口　大工石橋善吉　上市小路丁善右ヱ門（右側）

上市小路　城戸仁平仕立（前）

明治七年八月吉日造之（左前）

㉑絹今　現在破損して開かない、本来開いて御神輿にさしかける。　１人

㉒立傘　開かない　１人

㉓楽太鼓　２人でかつぎ１人が打つ。　３人

㉔楽人　箏蕭笛　８人狩衣

㉕御神輿台　御神輿のすぐあとにつくことが多い。　２人

㉖八乙女　飾りたてた女の子と手を引く親６人

㉗宮司　今回は馬はない

㉘総代

㉙氏子　多数　６人

以上

・楽

近来、神社祭礼等に楽が奏されることは、珍しくなったが、若宮八幡宮においては、氏子の中から、練習をして楽を奏することは貴重なことである。

太鼓１、龍笛４、ひちりき４の変則的な編成。

氏名　青木東　合原　吉木西

㊐　国武康一　㊗　国武　敏　㊉　今村康男

笛　松本千寿　笛　上野修平　ひ　今村優二
ひ　上野千代治　笛　上野恭一　ひ　今村哲二

演奏曲目は「越天楽」のみである。

拝殿の楽太鼓は、高さ150m、太鼓本体の径54cm、火えんは中央に、高いものが１で両側に７つずつ、太鼓には、神社紋の「三ツ巴」がある。

第２章　柞原八幡宮神幸祭（大分市）

神幸祭に使用される御旅所の構造形式は、正面３間、側面３間、入母屋造、向拝１間、向唐破風、銅板葺である。

建物はコンクリート被覆30cm程の基壇上にほぼ南面してたつ。花崗岩切石布敷上に土台を置き、皮むきの円柱をたてる。切目長押、内法長押で固め、柱上に舟肘木を置き、軒桁を受ける。２軒半繁・角垂木、妻飾りは菱格子である。正面と右側入側１間に跳高窓付き切目縁を付け正面に木階３級を設ける。

内部は幅広板敷き格天井で背面に１間の高棚を設ける。高棚部分も床は幅広く板敷きに、格天井を張る。

向拝は切石礎石をコンクリート被覆で木製礎盤上に円柱をたて、頭貫に平三斗（三斗枠肘木）を置く。中備は斗なし蟇股を三面に配す。正面大瓶束で、斗肘木で菖蒲桁を受ける。結綿は植物文をアレンジする。

屋根大棟に菊花文３個、唐破風上に１個付け、隅木木尻金物（銅）を付ける。向拝正面中備の斗なし蟇股は波文を彫る。

柱材は桧材、素木造である。軒唐破風板先端に刳型渦文を付ける。

神輿が、御旅所に入る順番と安置場所は、正面向って右より１、２、３輿（女性用）であって、上部に鳩がつく。

逆に神社に上る時３、２、１輿の順で出る。第３輿は小型神輿である。

柞原八幡宮御旅所は放生会の９月14日から20日まで開放する。

放生会当日３時より浜の市境内の火王宮拝殿で祝詞奏上がある。柞原御旅所とは別である。

３時から「上白木太鼓保存会」の御旅所まで太鼓をたたきながら行進（女性）。まわりを７人の竹笛をふく子供がとり囲む。

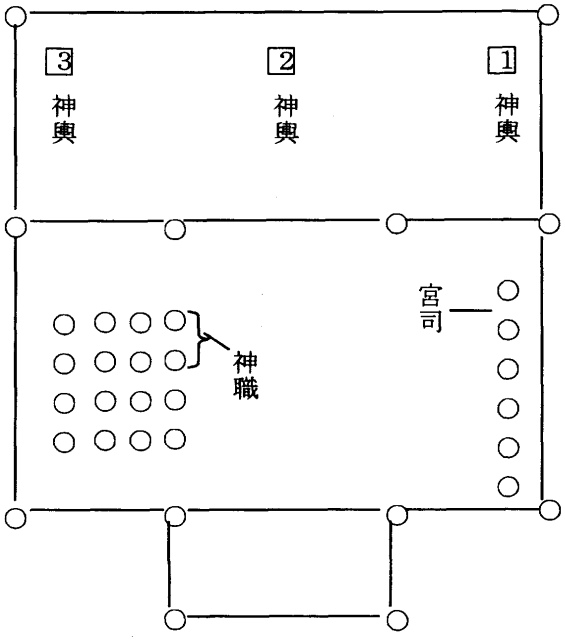
３時40分　「大久住太鼓保存会」
３時50分　「東八幡保存会」
３時55分　「民俗無形文化財　柞原太鼓」

○儀式

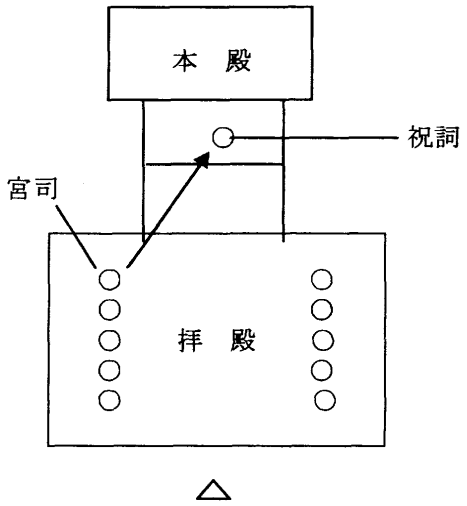
１、中央神輿前で宮司祝詞
２、左側の小社の扉をひらき祝詞（別の宮司）
３、玉串奉典
４、献饌を引きあげ左側の小屋へはこぶ。

御幸（御旅所から柞原八幡宮への上り）

１、先頭は賽銭箱（太った小学生が持参し、沿道の人々が賽銭を入れる。）
２、車上の神輿（浜の市近くデイリーの駐車場で神輿を車にのせて作原八幡宮まで運ぶ）
３、各御輿が本殿内に入り、御神体を本殿に納める。
４、空の御輿は、本殿向って右側の権殿に３基安置される。



（柞原八幡宮御旅所内配置図）



（火王宮拝殿内配置図）

○火王宮拝殿（平成18年９月20日）の神事は次のように進行する。

1．３時より祝詞を奏上する。氏子達は榊をあげる（玉串奉典）解散する。

ひきあげる際は入口に近い方からで、宮司は最後である。

2．そのあと右手の小社（善神王社）で祝詞をあげる。氏子は９人立つ。宮司右前にたつ。

第３章　八坂神社神幸祭（臼杵市）

御旅所は正面３間（9.1㍍）、側面四間（7.05㍍）の切妻造、茅葺きの上に鉄板を覆せた建物で、背面に5.29㍍の桟耳葺の下屋を付けている。このように、大型なのは、御旅所の建物内にそれ相当の大きさの神輿を三基安置するからである。毎年７月第２日曜日から１週間に亘って行われる神幸祭の時に八坂神社（大字臼杵字祇園洲）から、当御旅所へ神輿が三基渡る。それをそのまま御旅所に安置するので、神事舞の際一時的に御旅所は神輿庫となる。

三基の神輿は、それぞれ八坂神社に祀られる建速須佐之男命、櫛稲田姫命、大国主命のものである。

八坂神社は、承徳元年（1097）奥州から臼杵荘州崎岩ケ鼻に着岸し、二王座神ノ木原に鎮座し、州崎への神事を始めたらしい。その後、天正14年（1586）島津軍により社殿・宝物が破損され、文禄２年(2593)に再建された。翌３年（1594）に臼杵城主、太田飛騨守一吉が今の社地に社殿を建築した。慶長16年（1611）稲葉典通が神殿、拝殿を再建し、同17年（1612）神嶺として20石を下賜、その後、祭典費営繕費等を藩費から支出した。明治４年（1871）触園社を八坂神社に改めた。大正12年（1923）県社に列した。

江戸時代は臼杵の町八町が氏子であった。また、寛永20年（1643）７月に７日間の祭典（現在の７月第２日曜から１週間）が始められたと伝えられる。

現在の八坂神社本殿は安永５年（1776）に再建されたもので、その棟札が残る。[1)] 三間社流造、向拝１間の銅板葺の社殿である。

さて、御旅所は雨葛１段上にほぼ北西に面してたつ。正面に石段２段をつける。柱は杉の角柱で腰・内法・飛貫で固める。正面を除く三方に内法長押をつけ、正面には虹梁を各柱間に渡す。虹梁下端に指肘木を付け、虹梁と軒桁間に中備として束をたて、正面を飾る。

妻飾りは竪目板張りである。正面は嵌め殺しの板戸で、神輿を安置する際は取りはずす。背面は下屋へ続く。両側面は腰高窓で、板戸を嵌め殺す。

床は板張りで、天井はなく、化粧屋根裏である。架構は軒桁に梁を掛ける京呂組で、中央に牛梁を入れ、棟束をたて、扠首を組む。丸竹を垂木に使い、えつり竹を置き、茅を葺き、鉄板を覆ぶせる。棟に鰹木５本と両端に千木を飾る。

下屋は、片流れ桟瓦葺で向かって左側面の社務所から渡り廊下で繋ぐ。また、背面にアルミサッシ戸の出入口を付ける。外壁は下見板張りである。

御旅所に、大正９年（1920）の屋根葺替棟札が残る。調査の結果、御旅所の建立年代はこの頃と推察される。

また、これとは別に、昭和34年３月に屋根修理棟札が残るので、この頃に屋根葺替工事が行われたことが分かる。

他に、「祇園神殿竪」の棟札があるが打ちつけてあり、裏面に文字があるか、ないか不明である。もし、「大正９年」とでも記してあれば、建立年代が確定されるのであるが…。他に祈祷札が２枚程残る。

ところで、御旅所の前方に正面３間（約7.9㍍）、側面３間（約５㍍）、切妻造、茅葺に鉄板を覆せた拝殿がたつ。この拝殿も、御旅所と同時期の大正９年（1920）頃の建立と推察される。

拝殿は雨葛１段上にたち、切石礎石上に面取角柱をたてて、腰長押と内法・飛貫で固める。正面と背面中央間は虹梁を渡すが、他は鴨居をつける。四面吹放しで、両側面鴨居より上は竪目板壁である。床は板張り、天井はなく化粧屋根裏である。架構は和小屋観で御旅所と同一手法である。正面と背面の両脇間はもと腰板壁であった痕跡が柱に残る。

御旅所にこのように拝殿を設けているのは、それほど多くはない。その意味で八坂神社の御旅所をはじめ、神幸祭には興味を惹かれる。

おわりに

祭りをとおして、神社建築及び神社の空間構成、すなわち境内の建物配置、広場の取り方などを考察する一資料として、この神幸祭を紹介した。ここでは、一般に礼拝空間として利用される御旅所の建物（お仮屋）及び拝殿、そして境内広場の神幸祭の時の使われ方が明らかにされたと思う。

そして、神幸祭は中世は「放生会（ほうじょうや）」と呼ばれ、社事よりも仏事色の強いものであったらしい。しかし、明治になると仏事色が消え、神のための祭りとなり、さらに昭和になって獅子舞や風流が加わり、民衆の祭りの感じを受けるように変達していることも窺える。

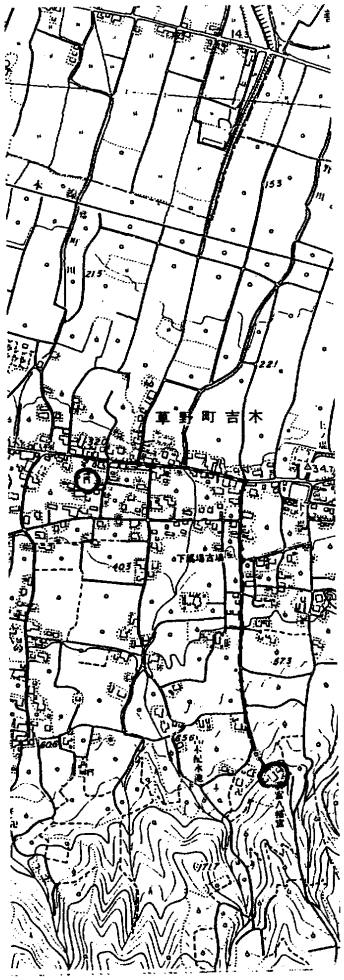
【注】

1）『臼杵史談』第84号（臼杵史談会　平成５年12月10日刊）１頁。

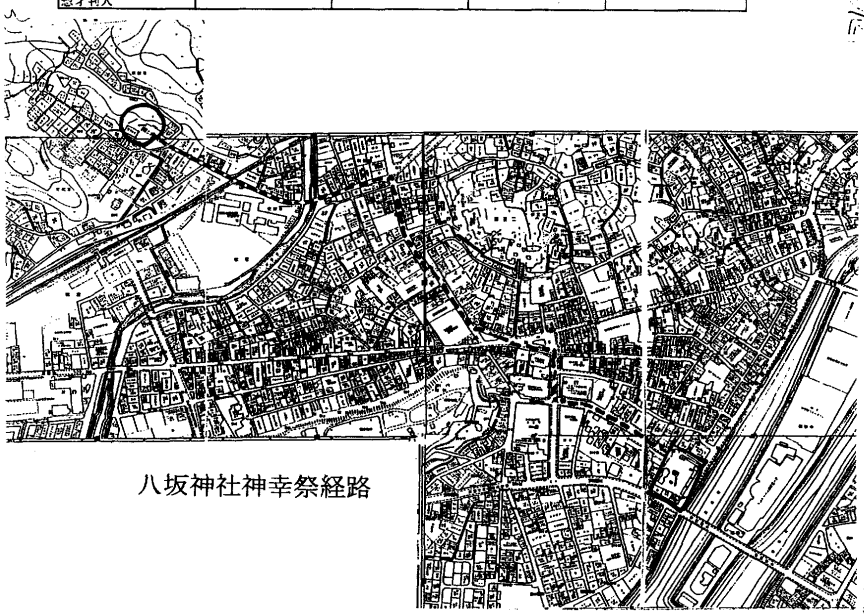
1）『臼杵市史』下（臼杵市　平成４年３月31日刊）96頁。

若宮八幡宮御神幸

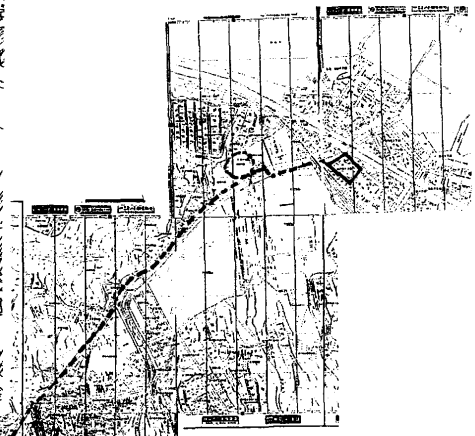
明治7年	明治8年	昭和54年	昭和58年	昭和60年
		獅子 16人	獅子 15人	1、風流先佛（鉄杖）
		獅子才判 6人	獅子才判 6人	2、大狩
		面	面	3、御汐井
		赤面 1人	赤面 1人	4、御供
		青面 1人	青面 1人	5、淡箱
		風流	風流	6、毛槍
			旗 1人	7、御旗
		小鉦 2人	小鉦 10人	8、指羽
		太鼓1個 3人	太鼓1個 6人	9、御燈
		笛 5人	笛 8人	10、御鉾
先払 2人	先払 2人	先払 2人	先払 2人	11、御弓
塩水 5人	塩水 5人	大狩 4人	大狩 2人	12、御太刀
御供櫃 3荷 6人	御供櫃 3荷 6人	御汐井 4人	御幣 2人	13、白杖
武者 2人	騎馬 6人	御供櫃 2人	御汐井 子供 4人	14、小狩
毛槍 7人	御燈 6人	淡箱 2人	御供櫃 2人	15、猿田彦
太麻 3人	白杖 6人	毛槍 4人	淡箱 2人	16、御神器
神官	幣帛 3人	御旗 5人	毛槍 黒 2人	17、大御幣
			白 2人	18、御神輿
御旗 6人	祠官（馬上）	御指羽 6人	御旗 赤 3人	19、耕今
			白 2人	20、台今
御燈 6人	2人	御燈 4人	御指羽 5人	21、楽員 楽太鼓
白杖 6人	5人	御鉾 1人	御燈 4人	22、八乙女
大狩 3人	大狩 3人	御弓 2人	御鉾 1人	22、区長、總代
小狩 12人	指羽 16人	御太弓 3人	御弓 1人	24、宮司、祭員
楽人 5人	道別面 2人	白杖 4人	御太弓 2人	25、氏子外
御弓 2人	神官 歩 2人	小狩 3人	白杖 4人	
大太刀 5人	小狩 12人	猿田彦神 2人	小狩 3人	
指羽 18人	御神輿 12人	御神器 2人	猿田彦神 2人	
猿田彦 2人	御笠持 1人	大御幣 3人	御神器 2人	
	台持 2人			
楽人	楽人 5人	御神輿 12人	大御幣 1人	
御神輿 12人	御鉾 1人	耕今 1人	御御輿 12人	
御笠持 1人	御神馬 3疋	立口 1人	耕今 1人	
台持 2人	口取			
御鉾持 1人	祠官（馬上）	御神輿台 2人	立口 1人	
神馬 4疋	笠持 1人	楽人	楽太鼓 3人	
口取 8人				
八乙女	的馬	楽太鼓	楽人 8人	
神官（馬上）	競馬	八乙女	御神輿台 2人	
弼掌		宮司	八乙女 6人	
同		総代	宮司	
祠官		氏子	総代	
区長			氏子	
戸長				
夜具左口米				
裝馬				
筑才判人				



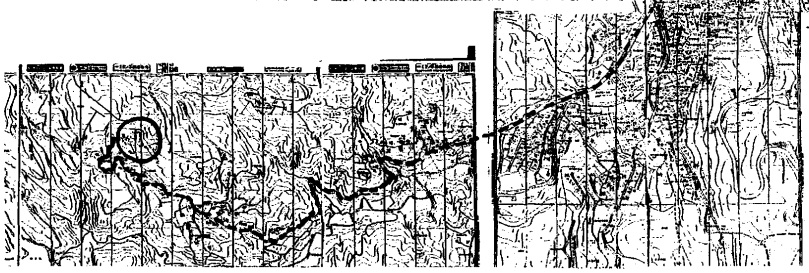
若宮八幡宮神幸祭経路

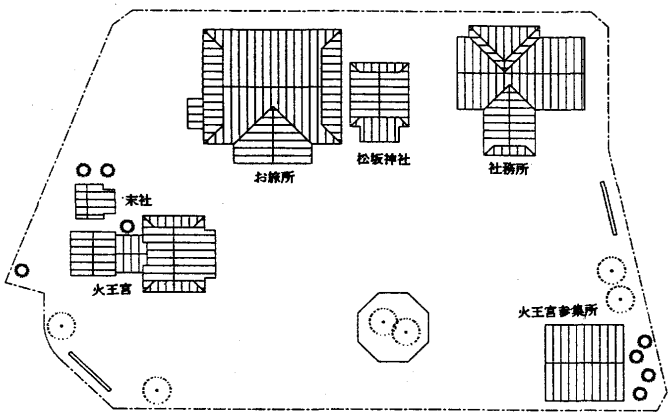


八坂神社神幸祭経路

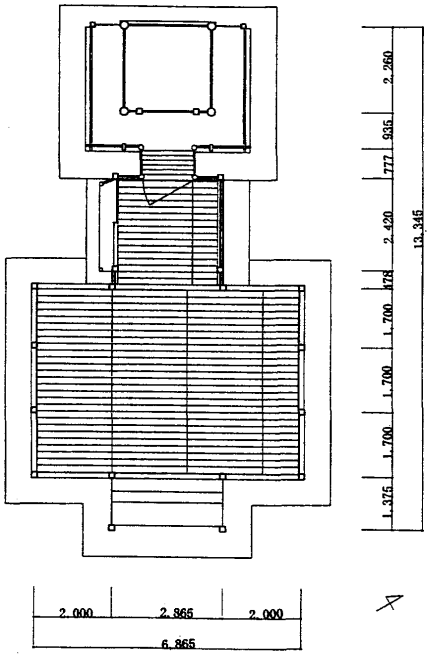


柞原八幡宮神幸祭経路

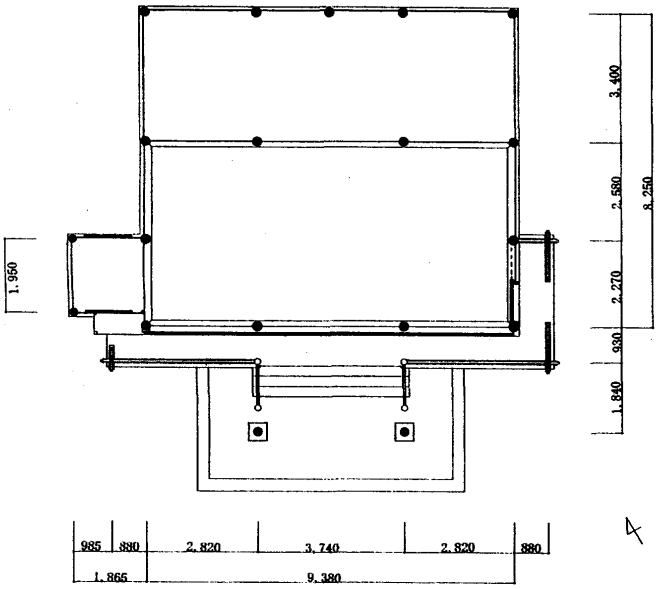




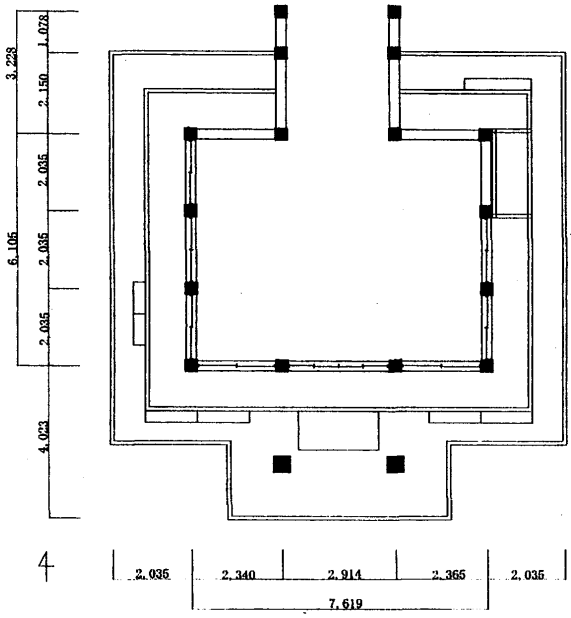
柞原八幡宮御旅所境内見取図



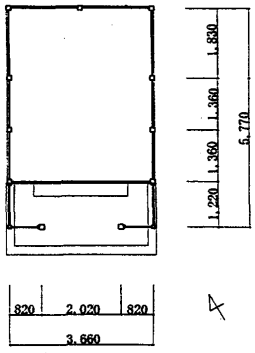
火王宮拝殿・幣殿・神殿



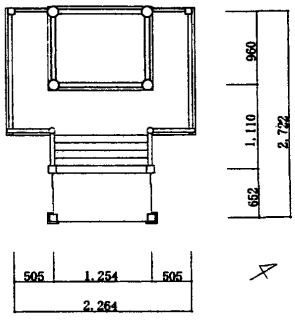
柞原八幡宮御旅所



八坂神社拝殿



浜の市松坂神社



浜の市末社